

令和5年度  
入学試験問題

国語

2月1日 第1限

仁愛女子高等学校



次の文章は、『風姿花伝』という日本の古典を現代語に訳したものである。文章を読んで、あとの問いに答えよ。（設問の都合上、文章には改変した箇所がある。）

①問。能には、「<sup>※1</sup>得手<sup>1</sup>得手」ということがあって、並はずれて下手な役者でも、ある一方だけ上手よりすぐれている所があります。その下手の長所を上手が探り入れて演じないのは、できないからでしょうか。それとも、まねてはいけなから演じないのででしょうか。

答。一切の事に、「<sup>こたう</sup>得手<sup>1</sup>得手」と言つて、各人に生れつき身につけている長所があるもので、能も同じだ。芸位では勝つていても、下手の得手の芸に上手が及ばぬことが確かにある。しかし、それを上手が学ばないというのは、まずまずの段階までを極めただけの上手の場合の話だ。真実、能の技術面の鍛錬と心中の工夫とがすっかりできている上手ならば、いかなる方面の芸であろうと、どうしてやらないはずがあるのか。したがって、下手の得手を上手が学ばないのは、能の技術的鍛錬と心中の工夫とを完全にし尽くした<sup>※2</sup>為手が、数多い役者の中に一人もいないがためである。なぜないかと言え、芸についての工夫はなく、逆に慢心があるからだ。

②いったい、<sup>2</sup>上手の芸にも欠点があり、<sup>3</sup>下手にも必ず長所があるものだ。しかるに、それを見分ける人もいないし、当人も自覚していない。上手は、名声に甘え、芸達者にうぬぼれて、欠点に気がつかない。下手は、もともと工夫しないから下手なのであって、欠点にも気がつかず、（<sup>※3</sup>稀有なる長所があることをも自覚しないでいる。だから、上手も下手も、ともに他人の批判を仰がねばならないのだ。しかし、能の技術と心中の工夫とを極めた為手は、自己の長所や短所を十分承知しているはずである。

④どんなにまずい役者であっても、その芸にすぐれた点があると認めたら、上手もそれをまねるべきだ。それが自己の芸を充実させる最良の手段である。もし、長所を認めても、「自分より下手な役者に似せられるか」という<sup>※4</sup>情識を持つては、その心に束縛されて、おそらくは自分の欠点をも自覚できないであろう。⑤そうした強情さがつまり、能と工夫を極めぬ心なのだ。また下手も、上手の欠点をもし見つけたなら、「上手の人ですら欠点がある。まして未熟な自分であるから、さぞ悪い所が多いだろう」と思つて、欠点の多いことを警戒し、人にも批判を仰いで、工夫し反省すれば、それがますます芸の錬磨になって、能が早く上達するであろう。もしそうではなくて、「自分ならあんなぐあいにはまずくはやらないのに」などと慢心を持つのでは、自分のすぐれた点をも実際には知らぬ為手にソウイあるまい。長所を自覚していないのでは、逆に悪い所をも良いと思つてしまうものだ。⑥そうした心の持ち様だから、いくら年を重ねても能は上達しないのである。こういうのがすなわち<sup>6</sup>下手の根性なのである。

そんなわけで、上手な人でさえ慢心があつては芸力が低下してしまうだろう。まして下手な役者の身の程をわきまえぬ慢心の弊害は甚大だ。上手も下手もよく次の課題をシアン<sup>c</sup>せよ。それは「上手は下手の□□□□、下手は上手の□□□□」との金言だ。この金言を十分に工夫せよ。下手のすぐれた芸を採り入れて上手が自分の演目に加えるのは、この上もなく有効なやり方だ。人の欠点を見てさえ自分の手本になる。まして良い所を見つけて学ぶ効果は絶大であろう。「稽古には強くあれ、情識はあつてはならぬ」とのモットーは、この点を戒めたものであるはずだ。<sup>d</sup>

(表章・小山弘志・佐藤健一郎「日本の古典をよむ」⑰風姿花伝・謡曲名作選」による)

※1 「得手得手」…人それぞれの得意芸。

※2 「為手」…能・狂言で主人公の役。また、その演者。

※3 「稀有」…めつたにない、珍しいこと。

※4 「情識」…慢心ゆえの強情さ。

問一 二重傍線の部分 a 「鍛錬」・ b 「ソウイ」・ c 「シアン」・ d 「戒」の漢字はその読みをひらがなで、カタカナは漢字で書け。

問二 傍線の部分①「問」に対する答えとして適当な部分を、文章の中から六十字で抜き出し、その初めと終わりの五字を書け。(句読点・符号を含む。)

問三 傍線の部分②「上手」・③「下手」のそれぞれが欠点に気がつかない理由を文章の中の言葉を用いて書け。

問四 ( ) に入る最も適当なものの記号を書け。

ア けれども    イ まして    ウ すなわち    エ だから

問五 傍線の部分④「束縛」の対義語を漢字二字で書け。

問六 傍線の部分⑤「そうした強情さ」とはどのようなものか。文章の中から二十五字以内で抜き出し、その初めと終わりの五字を書け。  
(句読点・符号を含む。)

問七 傍線の部分⑥「下手の根性」とは、どのようなものか。最も適当なものの記号を書け。

ア 上手の人でさえ欠点があるのだから、下手で未熟な自分には悪い所が多いと思ってしまう根性。

イ 下手な人は欠点が多いのだから、人に批判を仰いで、工夫しなければならぬと思ってしまう根性。

ウ 自分のすぐれた点を自覚していない下手は、逆に悪い所も良いと思ってしまう根性。

エ 下手な役者であっても、ある一方だけ上手よりすぐれている所があると思ってしまう根性。

問八 に入る共通の語として適当なものを、文章の中から抜き出して書け。

二 次の記事を読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。)

ここに一枚の写真がある。もう二十年も前に撮られたものだが、上部に画鋏がびょうを刺した穴が一つあるだけで、比較的色彩あせも少ない。特別、大切にしていたわけでもないが、過去五回の引越しても紛失せず、こうやって (A) 手元にあるのだから、そこそこ生命力のある写真なのだと思う。

写真には、高校最後の夏休みを謳歌おうかする自分と、ある女の子が写っている。場所は実家からバスで十五分の海水浴場、背後の空には夏雲一つない。

当時所属していたバスケット部の友人たちと向かった海水浴だった。そこにグウゼンa彼女が来ていた。彼女は親戚家族と一緒にだった。姪めいっ子たちのお守りなのよ、と笑っていた。学校で彼女と話をしたことはなかった。話もできないくらい好きだった。

沖へ泳いでいった友人たちの目を盗み、海の家でカメラを買った。姪めいっ子たちと砂遊びをする彼女に、決死の覚悟で声をかけた。一緒に写真を撮って欲しいと言うと、彼女は少し驚いて、「でも、今、これだし」と砂まみれの手を広げてみせた。

波打ち際で洗ってくる、という彼女に、<sup>①</sup>「そのままがいい」と言った。沖から口うるさい友人たちが戻ってくるのが見えていた。近くにいたおばさんに頼んで撮ってもらった。<sup>②</sup>「もっと近くに寄りなさいよ」と茶化すおばさんは人選ミスだったが、彼女は嫌な顔もせず、(B) 横にいてくれた。ただ、後日現像すると、これがひどい逆光逆光\*写真だった。

先日、久しぶりに休みが取れて、近所のスポーツセンターへ泳ぎに行った。その間にソウジbするから、息子の優太も連れていけ、と妻には言われたが、当の優太は滑り台がないスポーツセンターのプールに興味を示さなかった。

プールへ向かう途中に、野球場がある。野球場の脇を歩いていると、スタジアムからのカンセイcが、蝉せみの声に混じって聞こえた。高校野球の大会が行われているらしかった。正面玄関の方は混んでいるだろうと思ひ、裏口のほうへ回り込んだ。しばらく歩くと、がらんとした球場の裏に、ユニフォーム姿の男の子と、制服姿の女の子が立っているのが見えた。男の子の腕は日に灼やけて黒光りし、女の子の白い首筋が赤く火照ほてっていた。邪魔をしないように方向を変えると、私の足音に気づいた女の子が、(C) 駆け寄ってきて、「すみません、写真を撮ってください!」と言う。その表情がひどく焦っており、柱の陰にいる男の子も、そわそわと球場内を窺うかがっている。中で試合前の作戦会議でもやっていて、それを抜け出してきているのかもしれない。

「あの、お願いします！」

女の子に改めて言われ、その緊張感が伝わってくる。

私はカメラを受け取ると、思わず男の子が待つ場所へ駆け寄った。正直、記念写真というよりも、UFOでも見つけて慌ててカメラを構えるような気持ちだった。

カメラを覗くと、男の子が少しだけ迷惑そうな顔をしていた。それで二人の関係がなんとなく想像できた。逆光だったが、場所を移動したほうがいと提案できないほど、二人は焦ってみえた。自分が動けばいいのだが、その時間もないほど切迫した雰囲気だった。

仕方なくその場でシャツターを切った。切ったとたん、男の子は一礼して球場の中へ駆け込み、そこには日に灼けた女の子だけが残った。カメラを渡すと、「ありがとうございます」と深々と頭を下げる。目的を果たし、緊張がとけた、清々しい笑顔だった。

さつきプールから戻って、二十年も前の写真を眺めている。

写真には二十年前の自分と、当時大好きだった女の子が写っている。ただ、逆光のせいで、二人の顔は臙げにしか写っていない。考えてみれば、私にはもうこの臙げな彼女しか思い出せない。二十年の間に記憶は薄れてしまい、思い出せるのはこの逆光で笑顔を奪われた彼女だけなのだ。

しばらく眺めていると、妻がスイカを持ってやってきた。「何、それ？」と写真を覗き込むので、「高校の頃、好きだった子とのツーショット」と答えた。妻は、「へー」と言いながら写真を奪い、「何よ、これ。顔、分かんないじゃない」と笑った。

出て行くこうとする妻に、「さつき、これと同じことしちゃったよ」と私は言った。

「さつき球場とここで、写真撮ってくれて頼まれて、逆光だったけど……」と。

妻は興味もないらしく、何も言わずに出ていった。廊下で電車遊びをしている息子を軽く叱り、鼻歌を歌いながら。

(吉田修一「写真」による)

※1 「逆光写真」：被写体の背後から照らされる光によって、被写体が影のように暗く写った写真。

問一 二重傍線の部分 a 「グウゼン」・ b 「ソウジ」・ c 「カンセイ」を漢字で書け。

問二 二重傍線の部分 d 「清々しい」・ e 「臙げな」の品詞名をそれぞれ漢字で書け。

問三 ( A ) ( C ) に入る最も適当なものの記号をそれぞれ書け。

ア いまだに    イ とつぜん    ウ あたかも    エ じつと

問四 傍線の部分①「そのままでもいい」と言った理由を三十字以内で書け。(句読点・符号を含む。)

問五 傍線の部分②「『もつと近くに寄りなさいよ』と茶化すおばさんは人選ミスだった」とあるが、どんな人がよかったのか、最も適当なもの記号を書け。

ア カメラの構造をよく理解しているプロのカメラマン。

イ 特に何も言わず事務的にたんたん撮ってくれる人。

ウ 前もつてどのように撮ってほしいのか希望を聞いてくれる人。

エ ひやかしながらも二人の関係をあなたかく見守ってくれている友人。

問六 傍線の部分③「UFOでも見つけて慌ててカメラを構えるような気持ち」とはどのような気持ちか、最も適当なものの記号を書け。

ア 珍しいものを見つけ、ぜひいい写真を撮っておきたいという気持ち。

イ この瞬間を逃したら撮るチャンスはないという、時間を気にする気持ち。

ウ ずっと探していたものがやっと見つかって、うれしい気持ち。

エ 思いもよらない意外なものを発見して、興奮している気持ち。



問七 傍線の部分④「男の子が少しだけ迷惑そうな顔をしていた」とあるが、その理由として最も適当なものの記号を書け。

ア 男の子は本心を隠して、あえて素っ気ない態度を取ろうとしているから。

イ 他校の生徒に写真を一緒に撮ってもらいたいと突然依頼され、動揺しているから。

ウ マネージャーに記念写真を撮ろうと言われたが、練習中で時間がないのに気が利かなく感じたから。

エ 自分に思いを寄せている女の子に写真を依頼されたが、試合のことを考えて時間を気にしているから。

問八 傍線の部分⑤「これと同じこと」とはどういうことか、文章の中の言葉を用いて三十字以内で書け。(句読点・符号を含む。)

問九 「私」と妻とのやりとりのおもしろさをまとめた文章として、適当なものの記号を書け。

ア 息子と行ったプールの帰りで疲れている「私」が子どもの面倒も見ずに昔の写真を見ていると、妻が嫌味っぽく逆光の写真を笑ったところ。

イ 「私」が高校時代の初恋の思い出に浸っていたら、妻はそんな「私」を大人げないと思い、冗談交じりからかかっているところ。

ウ 野球場で起きた出来事から触発された「私」は昔の写真を見ながら思い出に浸っていたが、妻は気にとめるそぶりも見せず、日常生活が普段通り進むところ。

エ 写真をしみじみと眺めている「私」に嫉妬の感情を抱いた妻が、電車遊びをしている息子を叱りつけて自分のその気持ちを隠そうとしているところ。

三 三 次の二つの文章を読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。)

【文章A (原文)】

「といふ琵琶の御琴を、うへの持てわたらせたまへるを、見などして、かき鳴らしなどす」と言へば、弾くにはあらず、緒を  
まさぐりにして、「これが名な。いかにとかや」など聞えさするに、「ただいとはかなく、名もなし」とのたまはせたるは、なほいとめで  
たくこそおほえしか。淑景舎※2しげいしやなどわたりたまひて、御物語のついでに、「まるがもとにいとをかしげなる笙の笛こそあれ。故殿の得させた  
まへりし」とのたまふを、僧都※4そうづの君の「それは隆円りゆうえんに給うべ。おのれがもとにめでたき琴侍きんはべり。それにかへさせたまへ」と申したまふを聞  
きも入れたまはで、なほことごとをのたまふに、いらへさせたまつらむとあまたたび聞えたまふに、なほ物ものたまはねば、宮の御前※5みやのみまへの  
「いなかへじとおほいたるものを」とのたまはせけるが、いみじうをかしきことぞ限りなき。この御笛の名を、僧都の君もえ知りたまはざ  
りければ、ただうらめしとぞおほしためる。これは職の御曹司※6しやくのみざうしにおはしましたし時の事なり。うへの御前にいなかへじといふ御笛の候ふなり。  
御前に候ふ物どもは、みな、琴、笛も、めづらしき名つきてこそあれ。琵琶は玄上げんじやう、牧馬ぼくば、井手いで、渭橋みけう、無名むみやうなど、また、和琴わこんなども、  
朽目くちめ、塩竈しほがま、具などぞ聞ゆる。水龍すいりゆう、小水龍こすいりゆう、宇多うだの法師、釘打くぎうち、葉二つ、何くれと、おほく聞えしかど、忘れにけり。  
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦

(「日本古典文学全集11 枕草子」による)

【文章B (現代語訳)】

「」という名のある琵琶を、帝が宮さまのところにお持ちになったものを、試しにかきならしていらっしやるということだっ  
た。ひくというよりは絃げんなどいじりながら、「この名はなんと申しましたかしら。」と申しあげると、「なんでしたかねえ。名もないような  
ことでしたけれど。」といった「」という名をほめかすなげないお答えでたいそう気がきいている。

お妹さまの淑景舎の君がお見えになり、お話のついでに、

「わたしのところにとてもよい笙の笛がありますの。なくなられたお父さまがくださいました。」

とおっしゃるのを、宮さまの弟君、淑景舎の兄君の隆円僧都が、

「その笛を隆円にくださいまし。わたしのところによい琴がございますから、かえてくださいまし。」

とおっしゃったが、妹君はお答えもなくほかの話をなさって、何度もさいそくするようにおたのみになってもご返事がないのを、宮さまは、「いなかえじ。いや、おとりかえはしますまいと思っただけいらっしやるのよ。」

とおっしゃったのはおもしろかった。帝のお手もとにある笛の名は「いなかえじ」というのだ。そのことを僧都はごぞんじないので、うらめしいと思っただけいらっしやるごようすだった。これは宮さまが職の御曹司にいらっしやられたころの話だ。

帝のお手もとには、お琴もお笛も、みなめずらしい名まえがついている。

玄象、牧馬、井手、涓橋、無名などと名づけられた琵琶。朽目、塩釜、二貫、水龍、小水龍、宇陀の法師、釘打ち、葉二つ、そのほかたくさんの和琴や笛の名をきいたけれど、わすれてしまった。

(大庭みな子「少女少女古典文学館4 枕草子」による)

※1 「うへ」…天皇のこと。「帝」「御前」も同じ。

※2 「淑景舎」…「淑景舎の君」のこと。「宮の御前」と「僧都の君」の妹。

※3 「故殿」…「宮の御前」「僧都の君」「淑景舎」の父。すでに故人。

※4 「僧都の君」…「隆円僧都」「隆円」のこと。「宮の御前」の弟。「淑景舎」の兄。

※5 「宮の御前」…帝の後・中宮定子のこと。「宮さま」も同じ。「僧都の君」と「淑景舎」の姉。

※6 「職の御曹司」…「宮の御前」の仮住まい。

問一 傍線の部分①「名もなし」を参考に、空欄に入る共通の語を、【文章A・B】の中から二字で抜き出して書け。

問二 傍線の部分②「なほいとめでたくこそおぼえしか。」・⑥「また、和琴なども、朽目、塩竈、具などぞ聞ゆる。」から、係りの助詞をそれぞれ抜き出して書け。

問三 傍線の部分③「のたまふ」の主語として最も適当なものの記号を書け。

ア うへ イ 淑景舎 ウ 僧都の君 エ 宮の御前

問四 傍線の部分④「いなかへじ」を漢字混じりの表記に改めたとき、最も適当なものの記号を書け。

- ア 否、替へじ。
- イ 否か、得じ。
- ウ ゐなか絵師。
- エ ゐなか衛士。

問五 傍線の部分⑤「いみじうをかしきことぞ限りなき。」について、

- (1) そのように思ったのは【文章A】『枕草子』の作者である。作者名を漢字で書け。
- (2) 作者がそのように感じた理由となる次の文の空欄に入る最も適当なものの記号を書け。

琴と笛を交換してほしいという（ a ）の依頼に返事をしない（ b ）に代わって（ c ）が「いなかへじ」という（ d ）の笛の名前を利用して答えたから。作者は（ c ）のユーモアのセンスを「をかしきこと」と感嘆したのである。

- ア うへ
- イ 淑景舎
- ウ 僧都の君
- エ 宮の御前

問六 傍線の部分⑦「何くれと、おほく聞えしかど、忘れにけり。」から歴史的仮名遣いで表記されている部分を一文節で抜き出し、現代仮名遣いに直して書け。

このページは空白です。

このページは空白です。







